

仏師玉運法眼再考

林 宏 一

Buddhist Sculptor "Gyokuun-Hougen" II

Kōichi HAYASHI

はじめに

天正年間に武相地方で活動した仏師玉運法眼を取り上げるのは、これで三度目となる。初回は、埼玉県東松山市教育委員会が2001年に刊行された『泉蔵寺総合調査報告書』の「Ⅲ－3 観音像と仏師玉運」の項で、次いで2006年発行の本学博物館館報№46秋の号で「仏師玉運法眼のこと」と題してであった。内容的には、前者が仏師玉運法眼のひとと作品の基本的な考察となるもので、後者はそれを一篇の独立した小文に仕立て直したものにすぎない。

今回改めてここに取り上げるにいたったのは、既に知られている玉運法眼の作品

1. 天正3年(1575) 埼玉県東松山市上押垂泉蔵寺木造十一面観音菩薩立像
2. " 5年(1577) 埼玉県東松山市上唐子浄空院木造僧形坐像

他に、新たに次の2件の事績が確認できたことによるもので、

3. 天正8年(1580) 神奈川県厚木市三田清源院木造薬師如来坐像¹⁾
4. " 9年(1581) 八王子市越野町会館(旧観音堂)木造聖観音菩薩坐像²⁾

これにより仏師玉運法眼のプロフィールがより詳細に紹介できると考えたからである。

以下、一部既発表の文章と重複する箇所もあるが、新知見の作品も加えて改めて仏師玉運法眼の作品と人となりについて考えてみることにする。

(1)玉運法眼の事績 ― 作品の概要

まず、煩雑になるが各々の作品の概要から見ていこう。

1. 天正3年(1575) 泉蔵寺木造十一面観音菩薩立像 像高110.0cm

埼玉県のほぼ中央部、東松山市の南端上押垂の地にある天台宗泉蔵寺の観音堂本尊として傳來した像で、平成8年(1996)に解体修理され、像内から長文の造立墨書銘が発見された。本像は、すでに昭和55年に「室町時代の作と考えられ、市内における秀品の一つ」ということで市指定文化財に指定されており、昭和57年のから59年にかけて実施された同市の市史編纂事業にかかわる市内所在の仏像悉皆調査に際して改めて調査されたが、その時点でも墨書銘の存在



図1 泉蔵寺十一面観音立像



図2 同 左側面

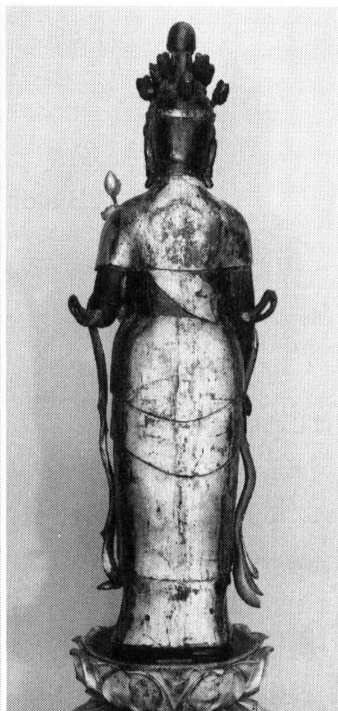


図3 同 背面

は知られていなかった。新たに発見された墨書銘には天正3年（1575）の年紀があり、概ねかつての調査時の時代判定が誤りでなかったことを証明することになったが、さらに玉運という仏師名が明らかにされ、関係者の関心を集めることになった。というのも、後述する同じ東松山市内上唐子の浄空院に伝来する天正5年（1577）銘木造僧形坐像に、すでに玉運の名が確認されていたからである。³⁾ ただ、その時点では玉運の名は初見であり、作品も肖像彫刻ということで作風の特徴が見きわめられず、いわば顔ばかりで影を持たない存在でしかなかったが、新たに泉蔵寺像の出現によって、ようやく実体のある仏師として把握できるようになり、研究への道筋が開かれることになった。

〔形状〕本面と10個の変化面からなる二臂直立の十一面観音像。五房に束ねた宝髻を結び、頂上部に如来面をいただき、その周囲に5個、地髪部周囲に5個の変化面を配し、正面額上には阿弥陀の化仏をつける。髪の毛は毛筋彫り。地髪部を飾る天冠台は、紐一条に列弁帯からなり、正面に一对の菊花型円鏤状の飾りを配し、各々その穴から一房の髪を八の字状に額に垂らす。白毫相を表し、頸部に三道を刻む。耳朵は環ならず、髪の毛一条耳にかかる。天衣・条帛に裙をまとう。裙は上に腰布をあてウエストやや下で深めに折り返す。右腕は垂下して掌前に五指を伸べ与願印を表し、左腕は胸脇で臂をまげて華瓶を執り、両足先を揃えて蓮台上に直立する。台座は蓮台、反花、框座からなる三重蓮華座。光背は周囲に飛雲を配した船形光背。



図4 像内墨書銘 背面

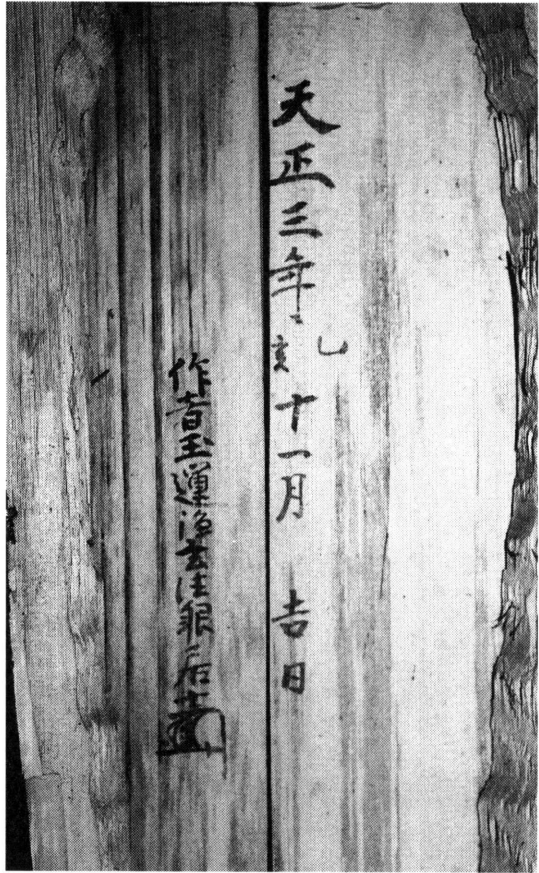


図5 同 前面

〔品質・構造〕寄木造、玉眼、錆下地に肉身部古色塗り、着衣部漆箔。

像の構造は、ヒノキの厚板状の堅材4材を前後に矧ぎ寄せて頭体幹部を組み立てる。背面材を除く3材は腹部と裾の正中2か所で薄板状の角の通い柄で接合する。頭部は、首柄部を構成する中央2材を三道下で割首。面相部、後頭部は各々別材（うち後頭部材は左右2材）となるが、いずれも体幹部の前面材および背面材と共木とみなされる。宝髻部は頂上仏面を含め前後2材（うち後部材は左右2材）からなり、通い柄で頭頂部に接合する。変化面、弥陀の化仏は各々別材。両腕は各々肩口で丸の通い柄を設け本体に接合。右腕は、肩先から前膊部の中程までと前膊部残りの部分と手先部からなる2材矧ぎ寄せ。左腕は肩、臂、華瓶本体部を含めた手先部の3材を矧ぎ寄せる。両足先は各々別材とし、左右の足柄は前面2材から造り出す。この他、両腕から垂れる左右の天衣および結び目、華瓶口縁部、未開敷蓮華等も各々別材とする。

像内は中央の2材の頭部と胸部および下半身の3区に分けて内刳を施し、下半身の内刳部に破損した菩薩頭部を納入する。天正3年の造立銘は、この内刳の壁を構成する前面材と背面材下半身部の2か所に分けて墨書されている。



図6 泉蔵寺十一面観音立像 頭部

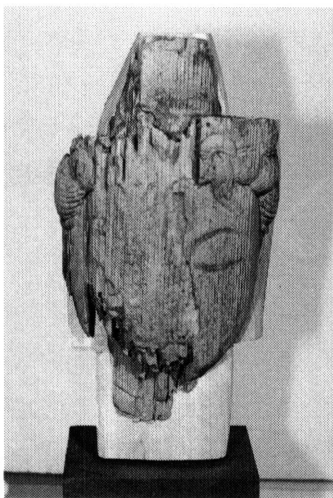


図7 同 像内納入菩薩頭部



図8 同 左側面

〔銘文〕

（像内背面材墨書銘）

「

敬白

種字（サ・観音） 奉為庚申侍供養造立十一面観世音結衆等 本願権少僧都

重慶 〕

の願文と左右7段から8段に振り分けられた僧俗男女58名の結衆交名が楷行草入り交じった柔らかな筆跡で一面に書き連ねられている。⁴⁾

（像内前面材墨書銘）

「 天正三年^レ十一月 吉日

作者玉運浄玄法眼居士（花押） 〕

と2行にわたって謹厳な楷書体で記している。

〔保存状況〕変化面6個、弥陀の化仏および持物の未開敷蓮華、表面の彩色・漆箔、光背・台座等は江戸期の後補。

平成8年の修理では造立当初の原状に戻すことを目標に、本体を解体して各部材を締めなおすとともに、表面の汚れや後補の彩色の除去と補彩、欠損・欠失箇所の修補等がなされた。また台座・光背も修理が加えられ、蓮台框座は新補された。なお、像内納入の菩薩頭部も保存修理のうえ、別に保管されることとなった。修理は、さいたま市所在の(旬)古文化財保存修復研究所長井武志氏が担当された。

銘に見られるとおり本像は天正3年（1575）の11月に、この頃から民間で盛んになり始めた庚申侍の供養本尊として本願権少僧都重慶以下僧俗58名の結縁により造立されたもので⁵⁾、作

者の玉運法眼は、ここでは玉運浄玄法眼居士とフルネームで名乗る。背面材と前面材の墨書は明らかに書体・書風に違いがあることから、前面材の年紀と作者名は玉運自筆によるものと判断される。本願権少僧都重慶は、その名前から天台もしくは真言等の密教僧と想定される。泉蔵寺が下青島浄光寺末の天台宗であることからすれば、天台僧であった可能性が高い。結縁衆として名を連ねる人物には、権少僧都常乗といった僧侶や禅尼・禅門を称する出家者、栗原孫七郎と姓を名のる武家階級を除くと、彦三郎・藤衛門等の名前のみ的人物によって占められている。彼らはこの頃在地で発言力と経済力を高めてきた有力農民層とみなされる。

像は、厚板状の材を4材前後に重ね合わせた構造を反映してかどことなく箱形に角張り、正・側面観とも平板・扁平な造形をみせる。四角く幅広な顔に強い眉、伏し目がちで切れ長の目、大きな鼻、小振りに引き結んだ唇を刻むが、やや散漫となり地味で暗めの表情となっている。胸から腹部、下半身にかけての体軀の表現も同様で、抑揚に乏しく平板な印象が強い。そうした体軀を被う天衣・条帛・裙等の着衣は、厚手の質感を強調し、複雑で装飾性のまさら衣文構成をみせるが、やはり陰影に乏しく図式的な表現となっている。総じて生硬でやや鄙びた造形性がめだつが、生々しい現実感を表そうとした面貌表現や賑やかに梳った髪の毛の一部が天冠台正面の一对の花飾りから一房流れ出し八の字状に額に垂れかかるあたりの表現、さらには思い切りよく強い線で彫りだした着衣の衣文表現等をみると手慣れた技巧への自信が認められ、作者がそれなりに経験豊かで熟練した彫技の持ち主であったことをうかがわせる。

像内に納入されていた菩薩頭部は耳のあたりで大きく前後二材に割れ、顔の右半分から宝髻部および首柄部にかけてひどく風化損傷しているが、ヒノキ材と思われるよく木目の通った良質の材を用いた寄木造、彫眼の像であったことが知られる。幾房にも結い上げ美しく梳った髪の毛の表現や端正な左半分の面貌表現等は鎌倉時代後半以降に流行をみた後期末風彫刻の特徴を示すもので、その堅実で格調整った様式技法からみると南北朝時代は降らない頃の製作と推定して差し支えなからう。装飾的でやや重たげな頭髮表現や額広く両頬が張り扁平な面取の面貌表現をみると、その頃の院派仏師の作風が認められる。なかでも注目されるのは天冠台左側に彫り出された円環状の花飾りから優雅に額に垂れかかる一房の髪の毛の表現や緩やかに弧を描いて一条の髪の毛が耳の中ほどに掛かる表現で、これは全く本十一面観音像に共通するところである。現在菩薩頭部は天冠台上からの地髪部と宝髻先端部が鋸等で切断削平され、変化面等を植え付けた痕跡は残っていないが、その形から類推すると旧は十一面観音であった可能性は極めて高い。このことからすると玉運法眼はこの菩薩頭部を手本にして十一面観音像の面貌を彫り上げていることは明らかといえよう。そうしてみると、この菩薩頭部は観音堂の旧本尊で、本十一面観音像はその再興像であったと理解することができる。おそらくあまりにも破損がひどかったので、天正3年に庚申待供養をかねて本十一面観音像を造立し、旧本尊像の御首を像内に納めその魂の継承を図ったものであろう。



図9 浄空院僧形坐像



図10 同 頭部

2. 天正5年(1577) 浄空院木造僧形坐像 像高28.5cm

玉運法眼の名がはじめて確認されたのがこの像である。泉蔵寺の所在地から西北方約5kmほどの都幾川左岸沿、上唐子の地に所在する曹洞宗の禅刹浄空院に伝来する。本像については、既に筆者が昭和40年代後半に調査をして墨書銘の存在を確認しており、前述の市史編纂事業に伴う市内の仏像悉皆調査に際して改めて取りあげられ、昭和60年3月に刊行された調査報告書にその概要と図版が収録されている。⁶⁾

〔形状〕円頂、着衣の僧形の坐像。頭体幹部のみの破損像。正面を向き内衣(右衽)に法衣を重ね、袈裟をまとう。老貌、眉の毛長く、口元にかすかな笑みを浮かべる。

〔品質・構造〕寄木造、彫眼、現状素地を表す。

構造は、頭体幹部一材から木取りし両耳の後ろを通る線で前後に割刳ぎ、頭部・体部に各々内刳を施す。前後材は鋸で接着するが、現在かなり遊離している。体部前面と背面に墨書銘を記す。

〔銘文〕

(像内前面墨書銘)

「玉宝院常住

願主源石沙門」

(像内背面墨書銘)



図11 同 右側面



図12 同 背面

「 浄玄（花押）
天正五年^{丁丑}九月吉日
作者玉運法眼 」⁶⁾

〔保存状況〕

頭体幹部のみが残存し、左右の側面部、両脚部を欠失する。頭部及び頸部の一部に下地の白土を残して表面の彩色も剥落する。その他眉、鼻、唇等表面の数か所に小さな損傷がある。

銘に見られるとおり、本像は泉蔵寺像に遅れること二年後の天正5年（1577）に玉運法眼によって造立された。願主の源石沙門は⁷⁾、他に資料がないため経歴を明らかにしない。玉宝院常住はその位置から推して彼にかかるものと考えられるが、現在その所在を失している。年紀の右側に「浄玄（花押）」の名がみえるが、前述したように昭和40年代の調査では玉運法眼の名は初見であったため、浄玄が何者であり、玉運法眼とどういう関係にあるのかといった点では他に手がかりがなく全くの謎であった。ところが泉蔵寺十一面観音像の墨書銘の出現により、「浄玄」は玉運その人にかかる名であり、正しくは彼の名は「玉運浄玄」であることが明らかとなった。浄空院像の浄玄の名の下に記された花押と、泉蔵寺像の玉運浄玄法眼居士の署名の下に記された花押の一致もそれを証明している。この頃の関東水墨画の画僧として知られる雪村周継の名等を参照すれば、玉運は字（あざな）、浄玄は諱（いみな）と理解される。

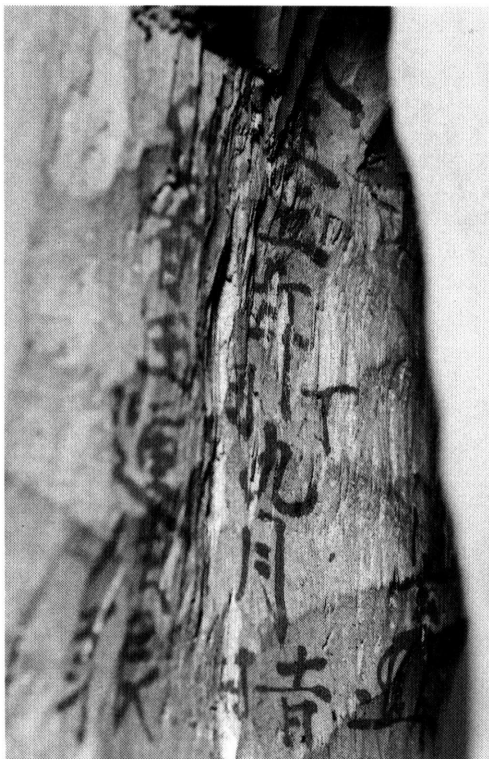


図13 浄空院僧形坐像墨書銘 背面



図14 同 仏師名

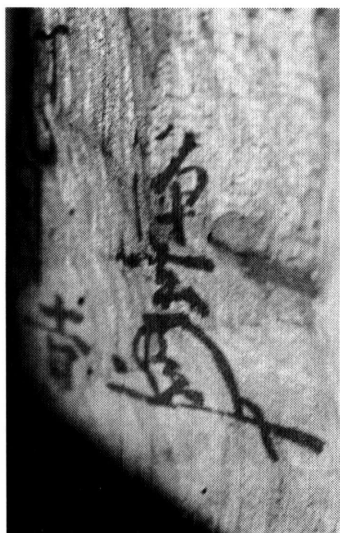


図15 同 仏師銘



図16 同前面 願主名



図17 同 寺名

像は破損がひどいが、その様式形制や禅宗寺院への伝来等から推して禅僧の肖像を表した頂相彫刻であったと判断される。記録伝承等が残っていないため像主の名を明らかにすることはできないが、幸い肖像彫刻のポイントとなる面部の保存が良好のため作風の特徴はつかみやすい。眉の毛長く、口元にかすかな笑みを浮かべる老僧の穏やかな風貌がてらいのない堅実な刀さばきで彫り出されている。いささか素朴で鄙びているとはいえ、眉から眼、鼻から唇、頬にかけての描写に写実的で柔らかみのある彫刻表現が認められ、像主の人間性の表出に誠実に取り組んでいる玉運の姿勢がうかがえ、好感の持てる作品となっている。ただ面部の表現を見ると、額から頬にかけて面取りが扁平かつ幅広な構成になっているところがめだつ。これは泉蔵寺十一面観音像にも共通するところで、ここに仏師玉運法眼の個性がうかがえるとともに、こうした表現様式が鎌倉時代末から室町時代の院派仏師の特徴に連なることから、彼もその系譜を受け継ぐ仏師であったことを物語っている。

3. 天正8年(1580) 清源院木造薬師如来坐像 像高21.5cm

本像については、平成元年3月に刊行された、薄井和男氏執筆による『厚木市史 中世資料編 仏像』(厚木市発行、以下『市史資料編』)によって所在を知った。以下、同氏の報告文に従いながらその概要を紹介する。

〔形状〕如来坐像。螺髪刻出。髪際緩やかにカーブ。白毫相を表す。耳朵環ならず。頸部に三道を刻む。着衣は下に內衣(僧祇支か)と裙を着け、偏衫・衲衣をまとう。偏衫は右肩から右腕を被い、衲衣は左肩から右肩に浅くかかり右腋下を通して偏衫の一端を挟んで腹部をつつみ再び左肩にかかる。右腕屈臂し掌前に向け第1指と第4指を捻じ、左腕やはり軽く屈臂して掌上に手先を左膝上に伸ばして薬壺を持ち、右足上に結跏趺坐する。

〔品質・形状〕寄木造、玉眼、肉身部金泥彩、着衣部漆箔。白毫珠水晶嵌入、頭髮群青彩、眉・髭を墨彩、唇を朱彩する。

像の構造は、頭体幹部を通して耳中を通る線で前後2材矧ぎとするが、後頭部材は別材で造り体幹部に挿し込む。左右の肩口より先に側面材を各々一材寄せ、像内に内刳を施す。両脚部は裳先を含めてを横木1材を矧ぎ寄せる。さらに両袖口部及び両手先に各々別材を寄せる。

〔銘文〕

(像内背面墨書銘)

(住物)
「 東福山胥原禅院□□
奉安請薬師如来像
(患)
檀那越知出雲守源□ 」

(同右側面部墨書銘)

「 同弾正忠影好老母
正春妙周妙善 」



図18 清源院薬師如来坐像
〔『厚木市史』中世資料編所収〕



図19 同 左側面

(同前面部墨書銘)

「 妙貞道明超翁源

宗□□

于時天正八年^{庚辰}八月吉日

玉運浄玄法眼謹彫刻 」

〔保存状況〕両手先材後補。表面の金泥彩、漆箔等の彩色及び像底布貼りは近年の修理による。

清源院の本尊として伝来する像で、銘により天正8年（1580）8月に玉運法眼が造立したことが知られる。近年の修理により厚めの彩色が施されたため、やや造立当初の原容が認めがたいところがある。像高21cm余りの小型の像で、頭部大きく体軀は小柄ながら側面観は頭奥・体奥ともに厚く、意外な重厚感をみせる。大粒の螺髪、頭の鉢張り低めの肉髻、猫背で箱形の体軀とそれを被う着衣の複雑で図式的な衣文表現、せまく薄い膝頭等に戦国期の仏像彫刻の特徴がよく表れている。ことに四角ばって幅広い顔に広い額、強い眉の線と眦の切れた伏し目がちの両眼、小さく引き結んだ唇等を配した平板な面貌表現は、泉蔵寺十一面観音像や浄空院僧形像でも指摘したとおり院派仏師の表現様式に共通するところが認められ、玉運法眼がその系譜を受け継ぐ仏師であったことを教えてくれる。

清源院は天文21年（1552）に回禄し、同年越知出雲守なる人物が中興開基したと伝えており、『市史資料編』では、墨書銘に檀那として名を見せる「越知出雲守源某」を同一人物と想定さ

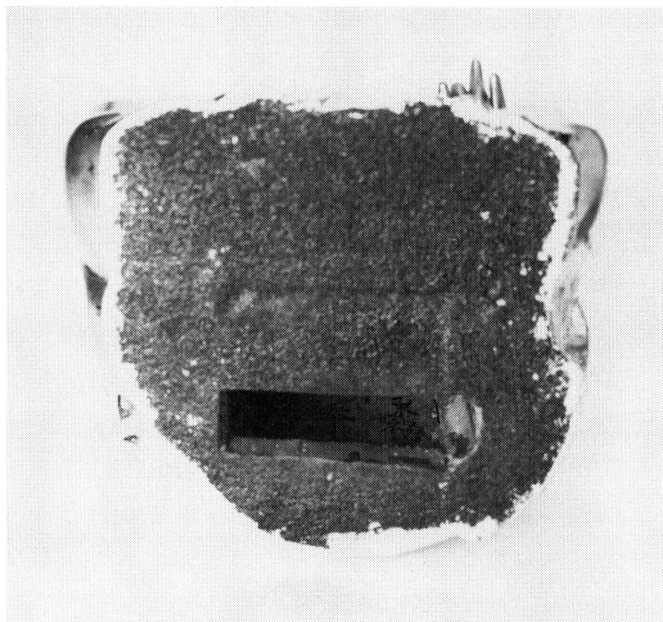


図20 同 底部

れている。天正8年（1580）までは28年を数えることからすると判断は微妙なところもあるが、可能性はあろう。同じく銘文中に名を見せる「同弾正忠」についても『北条氏所領役帳』にみえる「越智弾正忠」と同人の可能性を説かれている。人物の同定についてはさらなる詳細な検討が必要と思われるが、戦国末期の在地武将の信仰活動に関わっての造仏というところに玉運法眼の活動環境の一端がうかがえる事例として貴重といえよう。

4. 天正9年（1581）越野町会館（旧観音堂）木造聖観音坐像 総高57.2cm

古くは付近にあった天文2年（1533）創建と説く曹洞宗導儀寺観音堂の本尊として伝来した像で、明治初年の廃仏毀釈で寺が廃寺となり、また同11年の豪雨で堂宇も倒壊してしまったため、当時の越野村の人々が近くの長沼村の廃堂を譲り受けて観音堂を再興し観音講をつくって守ってこられたという歴史を持つ、地域の人々の心のよりどころとなっている観音像である。

既に昭和36年（1961）刊行の『南多摩文化財総合調査報告書』（東京都教育委員会）に取りあげられ、昭和45年（1970）2月には八王子市指定有形文化財となり、その後昭和48年刊の『郷土資料館資料シリーズ第13号 八王子の仏像』（八王子市郷土資料館）等に収録されるなどしてその所在は早くから知られていた。像内に天正9年（1581）の年紀を持ち、膝裏内刳部にも願主や仏師名を記した墨書銘があることから銘の内容もその都度紹介されていたが、解読に異同があり、仏師については「玉蓮（おうれん）法眼」あるいは「玉蓮（ぎょくれん）法眼」と読まれていた。⁸⁾ 名前の相似や年紀の接近していることから、あるいは「玉蓮」ではとの思いがあり、この度卯年御開帳の秘仏である本像を、特別に詳しく調査させていただく機会を得

た。⁹⁾ 肉眼と赤外線カメラによる銘文解読の結果、予想のとおり仏師の名は「玉運」であることを確認することができたので、以下その調査結果の概要を紹介する。

〔形状〕菩薩形。着衣の裾を台座の左右に長く垂らした法衣垂下像。

やや丈高い垂髻を結び、紐2条からなる天冠台を付け、髪際はゆるやかにカーブする。髻髪一条耳に掛かり、地髪・垂髻ともに毛筋彫り。白毫相を表し、耳朵は環状、頸部に三道を刻む。厚手の着衣をまとい、右上に禪定印を結んで右脚上に結跏趺坐する。着衣は下に內衣（僧祇支か）に裾を付け、裾の紐の結び目を腹部に表す。偏衫・衲衣をまとう。偏衫は右肩から右腕を被い、衲衣は左肩から右肩に深めにかかり右腋下を通して偏衫の一端を挟んで腹部をめくり再び左肩にかかる。左右に垂下する衣は、右側が偏衫の裾、左側が衲衣の裾により、その間前面に浅く垂下する衣は衲衣と裾の裾によって構成される。その他金銅製宝冠、胸飾りをつける。

光背は二重円光背、台座は蓮台、敷茄子、薬座、反座花、二重框座の五重蓮花座。

〔品質・構造〕ヒノキ材寄木造、玉眼嵌入、白毫水晶嵌入。肉親部漆箔、着衣部古色塗り。

像の構造は、宝髻を含め頭体幹部材を一材から木取りして耳後で前後に割矧ぎ、頭部は三道やや下で割首とする。両側面部は肩口から厚めに各々別材を矧ぎ寄せるが、右側面部材の矧ぎ目は直線状にならずジグザグに乱れて、体部材とも木目がそろふことから体幹部材と共木とみなされる。膝前に横木一材をあて、着衣の垂下部は正面及び左右各々の垂下部三材で構成される。両手先は手首より各々別材とし、宝髻頂上部後端も別材とする。頭体部に内割を施し像底は膝頭のレベルで上げ底式内割とする。膝裏内割部に墨書銘を記す。宝冠、胸飾りは銅板切り抜きに鍍金。

〔銘文〕

（膝裏墨書銘）

「再興旦那 玉眼旦那尾州住
小田野肥後守周重 鉄翁宗竹書□□

願主

相州保内之住侶実蔵坊

巧匠

相州之住玉運法眼 』

※ 像内に「天正九年」の造像銘があるという。¹⁰⁾

〔保存状況〕表面の漆箔、着衣の古色塗りは後補。両手先部及び前面と右袖の法衣垂下部も後補。その他金銅製宝冠、胸飾り、光背・台座も後補のものに替わる。このうち法衣垂下部の修理は意外と新しい印象があり、近代に入ってからのもものとみなされる。他は江戸時代のものであろう。

本像は法衣垂下という特徴的な彫刻形式をみせる。法衣垂下像は、後期宋風彫刻の典型として鎌倉時代後半から室町時代にわたって、とりわけ14世紀後半代の南北朝時代に流行をみたこ



図21 旧越野観音堂聖観音坐像

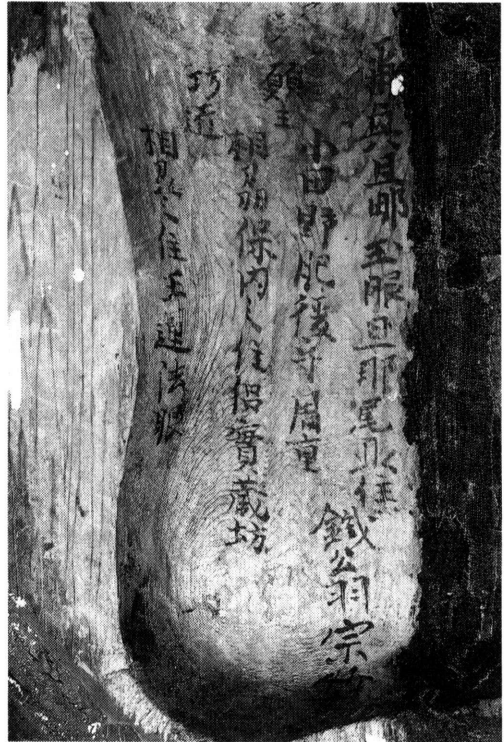


図22 同 膝裏内剝部墨書銘



図23 同 頭部

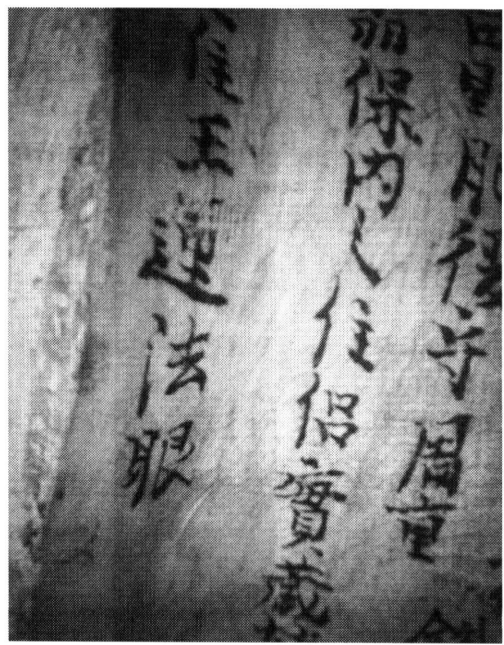


図24 同 墨書銘（赤外線カメラ）

とはよく知られている。本像もその整った様式形制や丁寧かつシャープな彫刻表現から14世紀後半の、もっとも充実した時期の作例の一つに加えられる作品と評価される。法衣垂下像としては小型の像ながら、しっかりとした量感表現と均衡のとれたスケールの大きな立体構成を示しており、仏師の練達した腕の冴えが覗える像である。おそらく有力な詫間派仏師の手になるものと考えて差し支えなからう。

さて、問題の膝裏墨書銘にみえる仏師名だが、先にも紹介したように従来「王蓮」あるいは「玉蓮」と読まれていた。今回の実査によれば、最初の一字は明らかに「玉」で、ただ「玉」の「丶」点が右方や離れて打たれ、墨色も薄れているため「王」と読まれていたものと判断された。2字目の「蓮」は、ちょうど冠の「冫」あたりの箇所がなにか硬い物で横一線にこすられた痕跡があり、字体がみだれ墨も擦れていることから「𠂔」のように見えないこともない。しかし、赤外線カメラをとおして見ると「冫」の第一角の起筆の墨色が強く、横角の末の下に向かってはねる角の墨色が強いために「𠂔」のように見えるだけのことで、本来は「冫」冠の「蓮」と読むのが正しいと判断された。

銘は文字どおり再興銘で、文面からするとこの時の再興事業の旦那は小田野肥後守周重（ちかしげ）、ただし玉眼のみは尾州住の鉄翁宗竹が旦那となり、願主は相州保内の住侶実蔵坊、そして担当の仏師は相州の住人玉運法眼と読みとれる。鉄翁宗竹の5字が他より一回り大きく、書体もやや違ってみえることから異筆と見る向きもあるが¹¹⁾、ちょうど筆を運びにくい箇所にあたっているのでそのような書体になってしまったものとみなされ、筆運びや墨色からみると一筆と見てよいように思われる。宗竹の下に「書」の字があるので銘の執筆者とみられているが、その下にさらに赤外線カメラでも解読困難な2字があり、ただちにそうとは判断できない。現在のところ、この鉄翁宗竹および願主の実蔵坊については詳細を知る手がかりはない。再興の旦那小田野肥後守周重も他に名前が見られず、詳しい経歴を明らかにしないが、同じ頃に北条氏照の家臣として活躍した小田野源太左衛門尉周定（ちかさだ・永禄～天正頃の人）という人物がいて、永禄4年（1561）長尾景虎軍の関東遠征に際し、氏照から命ぜられ同名肥後守・新左衛門とともに敵を攻撃した戦功により褒された記録等をのこしている¹²⁾。同姓で「周」の字を共有することから周重もその一族と考えられ、また肥後守という受領名を名のことからみても周定と同じく北条氏家臣団に名を連ねていた有力な武将の一人であったと想定される。前述の『郷土資料館資料シリーズ第13号 八王子の仏像』（昭和48年刊）では、『武蔵名勝図会』や『新編武蔵風土記稿』、あるいは小田野氏の子孫で小田氏と改姓して今日も八王子市柚木地区に居住されている小田家の過去帳等に拠りながら、小田野氏は八王子北条氏の家臣で、本来は下恩方の小田野に住居していたが、天正18年（1580）八王子城落城にともなって松木村（八王子市柚木）に移り住んだと解説されている。さらなる検討は後考を俟つとして、周重も周定とともに小田野氏一族の有力者の一人であったことはほぼ誤りなく、その勢威の表れが本像の再興旦那に名を記す縁となったのであろう。ちなみに永禄4年（1561）の長尾景虎軍との合戦で周定と戦をとともにした小田野肥後守は、あるいは周重その人を指す可能性も考えられる。

像内に「天正九年」(1581)の銘があるとされるが、現在割首の接合部がセメダインのような接着剤で接合されているため確認することができない。昭和36年(1961)の『南多摩文化財総合調査報告書』では、仏像彫刻研究の大先達丸尾彰三郎氏の執筆により「(3) 柚木村越野玉泉寺観音堂本尊 木造観音菩薩坐像 高0.40m 像内造像銘に天正9年(1581)と墨書する」とみえるので、当時は首の接合部が外れ像内を覗くことができたようである。膝裏の再興銘に見える玉運法眼の存在からすると、年代的にも符合するので「天正九年」の銘の所在は間違いないものと判断されるが、この年紀を造像銘とされたことで以後本像の造立年代は天正9年ということで継承されてくることになってしまった。これが誤りであることは像の様式技法からみて明らかで、像は14世紀後半代の典型的な法衣垂下像の一例と位置づけられることから、「天正九年」の年紀は膝裏の再興銘と一体になるものと理解しなければならない。

本像の場合、玉運法眼は古像の修理ということで彫刻技術や作風面の個性の表れを見いだすことはできないが、厚木市清源院薬師如来像の造立事情と共通する戦国武将に関わる仕事であることに、玉運法眼が仏師として恵まれた造仏環境を獲得していたことがわける事例として貴重といわねばならない。

(2)玉運法眼とその作風

天正3年(1575)の東松山市泉蔵寺像や同8年(1580)の厚木市清源院像の署名から、玉運法眼の名は正しくは玉運浄玄であることが明らかになった。この頃の僧侶の名乗りの例に従えば、玉運は字(あざな)、浄玄は諱(いみな)とみなされる。一方、法眼(ほうげん)の称号は、下位から法橋(ほっきょう)・法眼・法印とある僧位の中間位に当たり、僧官の律師・僧都・僧正の僧都位に並ぶものである。これら法眼等の僧位は、古代末以来絵師や仏師等の優れた職能者に与えられたもので、戦国期の京都や鎌倉の主だった仏師たちが「法眼」や「法橋」を称していることからすると、玉運浄玄は当時の関東の造仏界にそれなりにその存在を認められていた仏師であったことを物語っている。また、泉蔵寺像ではわざわざ居士号を名乗っている。通例居士号は在俗の禅業を修めるものの称であることからすると、玉運法眼は日頃在俗の禅行者として自他ともに認める生活を送っていたことがうかがわれ、それやこれやを考え合わせると、この頃玉運はしかるべき禅宗教団の庇護を受けていたか、あるいは禅宗寺院内で生活していた可能性も考えられよう。

さらに玉運は、越野観音堂像において「相州住」とその住所を明記している。この時期の武相地方で活動する仏師が単に「相州」と名乗る場合は、おおむね関東の都鎌倉をさす場合が多い。このことからすると玉運は鎌倉を本拠とした、いわゆる鎌倉仏師の一人とみなしていいように思われる。

さて、以上の検討から玉運の社会的なプロフィールはある程度明らかになった。最後に改めて玉運法眼の仏師としての技術や流派はどのようなものであったか確認しておきたい。

すでに各作例のところでは指摘しておいたので重複することになるが、まず目につくのは頭部、

特に面貌の表現であろう。もっとも特徴的なのは、額から頬にかけての面取りが扁平かつ幅広に行われていることである。この特徴は泉蔵寺像、清源院像のみならず、浄空院の僧形像にも同様に認められるところで、泉蔵寺像の場合はそのために目鼻立ちが平面的となり、むしろ陰鬱とも見える表情が強調されている。こうした独特な面貌表現は、鎌倉時代末頃から室町時代にわたって関東の各地で特色ある造像活動を展開した院派仏師の作品に共通するものであり、ここに玉運法眼の技術的抛りどころがどこら辺にあったかがはしなくも明らかにされる。

このようないわゆる院派系の様式表現の継承は、髪の毛の表現にも見いだすことができる。泉蔵寺像は、観音像であることから髪を美しく結い上げており、宝髻は五房に束ね、丁寧に梳った地髪を列弁文を刻んだ天冠台で押さえ、正面左右に並置された環状の飾りから各々一房の髪を額上に八の字状に垂らし、さらに緩やかに孤をえがいた一条の髪が左右の耳の中程に懸かっている。このような装飾的な髪型は鎌倉時代以来の宋風彫刻の流れを汲むもので、額の髪の生え際に地髪部が厚く重たげに被さるような表現も、やはり院派の菩薩像によく見られるところといえよう。

前にも紹介したとおりこの髪型は、泉蔵寺像の像内に納入されていた菩薩頭部のそれと瓜二つといってよい。破損がひどく全体像で比較対照することはできないが、髪際で幾房かに整えた地髪を美しく梳り、天冠台正面左右の円環状の飾りから各々一房の髪を額上に八の字状に垂らし、さらに緩やかに孤をえがいた一条の髪が左右の耳の中程に懸かっているあたりの表現は全く同一である。面相部も鼻を含めた右半分を大きく欠損しているため比較しにくいだが、額から両頬にかけての面取りが扁平で幅広いところが見受けられ、この点も玉運の観音像に共通しており、その様式表現の特徴から院派仏師の手になったことをうかがわせる。既に指摘したように、この菩薩頭部は旧本尊像の残欠と考えてほぼ間違いない。おそらく玉運は観音像の造像にあたって、この菩薩頭部を手本にしたものと思われる。

さらにこの他に院派系とみなされる様式表現としては、着衣や体軀の表現もあげられよう。

泉蔵寺像を例に取りあげると、菩薩像の常として上半身に条帛、天衣をまとい、下半身を裙で被っているが、いずれも厚手の布地の質感を際立たせ、幾重かに折れ返った衣文線も重たげで複雑な構成をみせる。ことに下半身を被う裙は、その上にもう一枚腰布をあててウエストで折り返していることもあって、いっそうその感が強い。同様の表現は清玄院像にも認められ、厚手の法衣に彫り深く調子の強い線でいささか過剰ともいえる衣文構成を施しているのが目にとまる。こうした図式的で装飾的な衣文表現も院派の如来や菩薩像によく見受けられるところといってよい。

一方体軀の表現においても、泉蔵寺像では右腕を垂下し、左腕屈臂し華瓶を持って蓮台上に直立する体軀がどことなく箱形に角ばり、生体としての働きをいったん停止してしまったような硬化した肉身表現となっていて、ここにも院派の彫刻表現の特徴が見いだせる。清源院像ではそれがより顕著で、大きな顔、箱形で猫背、幅広で奥行きのある頭体幹部に比して小さく薄めの膝前部といった方形のブロックを組み合わせたような立体構成に院派の特徴がよく表れて

いる。

このように眺めてくると、玉運法眼の仏師としての技術や流派がどのようなものであったかが、概ね明らかにされよう。彼の遺した泉蔵寺十一面観音像及び浄空院僧形像、清源院薬師如来像の様式表現の特徴を見るかぎり、彼は院派系の仏師であったと判断して差し支えない。鄙びた土臭さと都風の雅さが混じり合った、芸能でたとえるなら田楽・狂言のような一種独特の雰囲気を持った造形性が鎌倉時代末から室町時代にわたっての院派仏師の特徴だが、玉運法眼もしっかりとその特徴を受け継いでいる。決して洗練され、才気のある技量の持ち主ではないが、堅実で誠実な造像を手がけた仏師であったといつてよからう。

天正年間という彫刻史的には中世から近世への過渡期的な時代の、しかも世情不安定な関東の地での造像であることを考えれば、ここに見られる堅実でまっとうな、それなりに正統的な彫刻技術の継承は評価されるべきものであり、玉運が当時の当地方において一流の仏師であったことを物語っているように思われる。

おわりに

新たに確認された天正八年（1580）厚木市清源院像と同9年八王子市越野観音堂像の2件の作例を加えることによって、仏師玉運法眼の実像はより確かなものになってきた。今後調査が進めばさらに作品は増加するものと思われるが、天正年間、武相地方のかなり広い範囲にわたって新仏の造立や古仏の再興に腕をふるっていた様子がみてとれる。願主には禅宗や密教系の僧侶と地元の有力農民たち、旦那には後北条氏配下の在地の戦国武将の名がみえることから、いかにも戦国期らしいはばひろい階層を支持基盤として活動していたことが知られ、この頃の鎌倉仏師の活動実態の一端をよく現している。

天正年間も初めの頃は、関東では運慶様を基調とした慶派系鎌倉仏師の活動がめだち、そろそろ京仏師の進出も盛んとなる時期でもあった。こうしたなかで玉運法眼が、当時としてはいささか影の薄い存在であった院派の技術を伝えていたことは、関東のこの時期の彫刻史を考えるうえで大いに興味深い事実といつてよい。

註

- 1) 『厚木市史 中世資料編』 1989 厚木市
- 2) 『南多摩文化財総合調査報告書』 1961 東京都教育委員会
『八王子の文化財第4集 仏像編』 1973.3.31 八王子市教育委員会
『郷土資料館資料シリーズ第13号 八王子の仏像』 1973.7.1 八王子市郷土資料館
- 3) 昭和48年に、現地で筆者が調査している。
- 4) (像内背面材墨書銘)

「 藏之助 彦三郎 助二郎 三郎四郎 小四郎 孫四郎 源兵衛
五郎兵衛 孫右衛門 源太郎 弥五郎 彦四郎 助兵衛 青田
神衛門 神左衛門 七郎左衛門 根岸 藤野 彦三郎
栗原孫七郎 藤衛門 半左衛門 藤右衛門 柴村 善次郎 四郎兵衛
野中

敬白

種字(サ・観音) 奉為庚申待供養造立十一面観世音結衆等 本願権少僧都

重慶

権少僧都常乗 妙心禅尼 半兵衛 祢々御 七郎兵衛 藤兵衛 五郎兵衛 八郎三郎
妙吟禅尼 妙幸禅尼 五郎兵衛 柴生田 与太郎 与三郎 賀正 太郎兵衛
道金禅門 と祢御 彦四郎 神田 神兵衛 橋本 新兵衛 助五郎
手子 源三郎 関口 小三郎 左衛門太 神兵衛 」

- 5) 同時期の彫刻の遺例としては、元龜3年(1572)狭山市円光寺銅造十一面観音立像が知られている。この他、この頃に庚申待供養のために造立された板石塔婆の事例は多い。
- 6) 『仏像一東松山市仏像調査報告書一』では玉蓮法眼とされているが、玉蓮が正しい。
- 7) 『新編埼玉県史』資料編九 第一節彫刻(1989)所収の銘では願主源右衛門となっているが、源石沙門と訂正されたい。
- 8) 『南多摩文化財総合調査報告書』、『八王子の文化財第4集 仏像編』、『郷土資料館資料シリーズ第13号 八王子の仏像』等東京都・八王子市関係では「王蓮」
『鎌倉の在銘彫刻(室町時代)』巻末鎌倉彫刻史年表(1976 鎌倉国宝館刊)では「玉蓮」とある。
- 9) 調査は筆者と鈴木泉氏とで行った。
調査の実現にあたっては、越野観音講代表小川栄一氏に格別な御配慮・御協力を賜った。
また、調査当日には小川氏はじめ観音講中の田中孝一、大衆義明、石井義長諸氏に立会をいただいた。越野観音講への紹介については八王子市市史編纂室長佐藤広氏、八王子市教育委員会文化財課土井氏の御協力を得た。ことに佐藤氏には調査に同行賜った。記して、心からの感謝の意を表します。
- 10) 2) 参照参照
- 11) 『八王子の文化財第4集 仏像偏』 1973 八王子市教育委員会
- 12) 『郷土資料館資料シリーズ第13号 八王子の仏像』 1973 八王子市郷土資料館
『戦国人名辞典』2006 吉川弘文館

〔法量〕単位cm

泉蔵寺木造十一面観音立像

像 高	110.0	髪際高	91.4	頭頂～顎	30.0	髪際～顎	11.4
耳 張	12.4	面 張	10.6	面 奥	12.7	肩 張	18.4
臂 張	29.5	胸 奥	10.5	腹 奥	13.4	裾 張	21.0

裾 奥 14.0 足先開き（内）8.7 （外） 16.0

浄空院木造僧形坐像（現状）

像 高 28.5 頭頂～顎 11.2 耳 張 8.0 面 張 6.9
 面 奥 9.2 肩 張 12.8 胸 奥 10.8 腹 奥 11.6
 体部最大幅 13.0

清源院木造薬師如来坐像

像 高 21.5 髪際高 18.0 頭頂～顎 8.7 髪際～顎 5.2
 耳 張 6.0 面 張 4.9 面 奥 7.0 肩 張
 臂 張 14.2 胸 奥 7.7 腹 奥 8.3 膝 張 16.7
 膝 奥 14.0

越野観音堂木造聖観音坐像

総 高 57.2 坐 高 40.3 髪際高 31.6 頭頂～顎 15.9
 髪際～顎 7.2 耳 張 8.8 面 張 6.6 面 奥 9.7
 肩 張 15.0 臂 張 22.9 胸 奥 10.7 腹 奥 13.4
 膝 張 29.0 膝 奥 22.4 裾 張 35.5

後 記

この稿を作成するにあたって、次の方々に御協力、御教示を賜った。お名前を記して心からの感謝の意を表します。（順不同、敬称略）

越野観音講代表 小川栄一 浄空院 浅田泰徳 清源寺 和田正道 泉蔵寺

斉藤経生 佐藤広 鈴木泉 薄井和男 長井武志

八王子市教育委員会 八王子市立郷土資料館 厚木市教育委員会 東松山市教育委員会

埼玉県立歴史と民俗の博物館